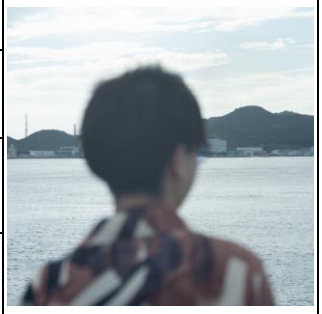
**報道資料②**

関　係　各　位

山口市長　伊藤　和貴

# 第３１回中原中也賞の発表

<table>
<tr><td>受賞詩集</td><td colspan="3">彼方の幽霊</td><td rowspan="5">  </td></tr>
<tr><td>著者名</td><td colspan="3">成清朔</td></tr>
<tr><td>出版社</td><td>私家版</td><td>刊行年月日</td><td>２０２５年１１月１７日</td></tr>
<tr><td colspan="2">著者の住所<br>京都府</td><td colspan="2">出身地<br>愛知県</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>年齢</td><td>２６歳</td><td>生年月日</td><td colspan="3">平成１１（１９９９）年４月１２日</td></tr>
<tr><td>性別</td><td>ノンバイナリー</td><td>職　　業</td><td>DTPオペレーター</td><td>最終学歴</td><td>立命館大学<br>スポーツ健康科学部</td></tr>
</table>

《コメント》

ほんとうに話したいことはいつも自分の内側を血液のように回り続けていて、ここにあるとわかっているのに声まではあまりにも遠い、詩はきっと、自分にとって勇気のようなのだと思います。詩を書くことは、火のように、水のように、形を変えながら自分のなかにあるものを、脈にふれてたしかめるようなもので、それは安心と同時に小さな勇気を与えてくれるものだと感じます。

いつかの自分に、いつか彼方の幽霊たちに、いつかのあなたにどうか届いてほしいと思います。とても大切で特別なこの詩集と出会ってくださったみなさま、選んでくださった選考委員のみなさまに感謝申し上げます。

《選考経過》

公募、推薦の詩集２６７点について本年１月に開催された推薦会での検討の結果、柴田聡子『ダイブ・イン・シアター』、素潜り旬『自画像と緑の光線、アワー・ミュージック』、成清朔『彼方の幽霊』、久原みな子『生成』、福島直哉『星の身体』、丸山零『二つの引き出し』、渡辺八畳『唇に磁石』の７冊が選ばれ、本日の選考会の対象とされた。

久原みな子『生成』、福島直哉『星の身体』、素潜り旬『自画像と緑の光線、アワー・ミュージック』はそれぞれに魅力とセンスを持つ詩集だが、議論を進める中で、他の４冊に絞られた。渡辺八畳『唇に磁石』は故郷と記憶を背景とする詩や現代社会への異議申し立てを含む詩などの他に新聞の切り抜きを用いたコラージュ的な作品等もあり、アイデアやユニークさは評価された。他方で、カタカナ語をめぐる違和感や一冊としての構想の見えにくさに関して物足りなさを指摘する意見も出された。柴田聡子『ダイブ・イン・シアター』は他の詩集とは違う位置付けができる点に注目が集まった。一貫して話し言葉を使っている点やユーモアが評価された。同時に、融通無碍な手法から生じるともいえる取りとめのなさについて疑問の声もあがった。

最終的な議論の対象となった詩集は丸山零『二つの引き出し』、成清朔『彼方の幽霊』だった。『二つの引き出し』は、自然物と主体との対比や距離を風景的に描いている。作品のほつれやほころびがむしろ詩集としての良さに通じているという意見やこの詩集の身体性にはＡＩ時代への抵抗感も見られるという意見が出された。魅力のある作品は少なくないが観念的すぎるという指摘もあった。『彼方の幽霊』は、他の詩集にはないほどの緊張感や揺らぎを詩に捉えようとする試み、世界に対する疑念との向き合い方が評価された。「ゼロ年代詩」を想起させるという意見もあったが、それでもなお今を生きる個人の主体と身体を詩に導き入れようとしていることや葛藤が見て取れ、そこに評価が集まった。議論を重ねた結果、第３１回中原中也賞は全員一致で成清朔『彼方の幽霊』に決定した。

| |
|---|
| 選考委員：カニエ・ナハ、川上未映子（かわかみみえこ）、野崎有以（のざきあい）、蜂飼耳（はちかいみみ）、穂村 弘（ほむらひろし）（５０音順・敬称略） |
| 《山口市長コメント》<br>第３１回中原中也賞が、成清朔さんの詩集『彼方の幽霊』に決定しましたことを、心からお祝い申し上げます。<br>この度受賞されました成清朔さんが、今回の受賞を契機に尚一層、活躍の場を広げられ、更なる飛躍をされますよう心から御期待申し上げます。今後とも多くの方が、日本の近代詩史に偉大な足跡を残した本市出身の中原中也の業績を顕彰するこの賞をひとつの目標として創作活動に励んでいただければ幸いです。<br>令和８年２月２１日　山口市長　伊　藤　和　貴 |

※受賞者の年齢は、R8.2.21 現在